

そうかもしれない

—— 高齢者文学人生論

耕治人 (1906-1988)

『そうかもしれない』 (1988) 「講談社」

『天井から降る哀しい音』 (1986)

『どんなご縁で』 (1987)

『詩人に死が訪れるとき』 (1971)

「あなたのご主人ですよ」「そうかもしれない」

永井荷風 (享年七十九歳) は死の前日まで日記『断腸亭日乗』を書き続けた。山口瞳 (享年六十八歳) はコラム・日記『男性自身』を死ぬまで一度も穴をあけずに連載し続けた。

二人とも生涯現役の作家だが、さすがに最後はペースが落ちていたような印象を受ける。人生のレースではゴール間際になると、誰だって体力、気力がおとろえる、

ところが、耕治人 (享年八十一歳) の場合は、生涯の最後にラストスパートをかけ、『天井から降る哀しい音』『どんなご縁で』『そうかもしれない』という三部作を完成させてから死んだ。

永井荷風のように文化勲章を受章していない。山口瞳のようにマスコミで脚光をあびたこともない。まことに地味な作家だが、気力をふるいたたせ、最晩年になって、代表作をこの世に遺すことができたのは奇蹟としか思えない。

七十六歳で急に体の衰えを感じ出した作家は寝たきりになるのを恐れた。結婚して五十年間尽くしてくれた妻にこれ以上の苦労はかけられない。そこで、生まれ故郷の柴田 (有明湾に面した町) を死に場所ときめた。

「もう十年も墓参りにゆかないし、体が動くうち、お参りしてきたい」と言うと、妻が支度をととのえてくれた。予定通り旅立ったが、死に切れず、帰ってきた。そのとき死んでいれば、逆に夫

そうかもしれない

—— 高齢者文学人生論



が妻を介護をすることもなかっただろう。

やがて妻は台所のガスをつけ忘れて、鍋を真つ黒に焦がすようになった。夜中にドスンという大きな音がするので、電灯をつけたら、二つのベッドの下に妻が落ちている。寝間着の裾から小水が静かに流れ出、畳を這い、溜まりを作った。腰から脚の爪先まで拭いてやると、「どんなご縁で、あなたはこんなことを」と妻は呟いた。

その後、妻は老人ホームに入所し、夫はガンで病院に入院する。死の床にいる夫を見舞いにきたが、妻は夫を認知できない。「あなたのご主人ですよ」と看護婦から何度も言われ、「そうかもしれない」と答えた。

作家は五年前、死に場所ときめた故郷でなぜ死ねなかつたのか。故郷には父母と二人の兄と姉と妹の墓があつた。みんな若いころ、死んでいる。墓参りをして、三日三晩さまよっているうちに、作家の身体の淀みは消えていた。

死者たちが彼をこの世に押し戻したとしか思えない。肉親ではないが、そんな死者がもう一人いた。作者が師事した詩人の千家元麿だ。作者には『詩人に死が訪れるとき』『この世に招かれてきた客』という作品があるが、その客とは元麿のことだ。作者は元麿の詩の色紙を貰っている。

私は神に招かれて

此の世に客に来たのだ

私は生まれたのを喜ばなければならぬ

元麿